

私には一歳になる男の赤ちゃんがいましたし、母もお産したばかりでしたので、どこにも疎開せずに、家族みんな揃って、自分の家の壕に入っていました。

近くの上田原には、山部隊の佐久間大隊が駐屯していました。五月中旬から、米軍は上田原と東風平の小学校をめがけて、どんどん激しく攻撃していました。

そして砲弾の破片が、どんどん私たちの壕の方にも落ちてくるんです。それで、こっちは壕はもう安全でないから、島尻の方へ逃げようということになって、その準備をしていました。ところが私の母親は産後一週間でしたからね、この軀では島尻まで避難するのは無理だからね、どうしてもこうしても、自分の壕で最後まで頑張ろうかという話も出たんです。

私の父親は、軍属で、伊良波部落(豊見城村)の友軍の飛行場に行っていましたけど、むこうから夜道を歩いて逃げてきていました。そしてね、こっちにいたら危いから夜通しかかってでも逃げた方がいいよ、必ず避難しなさいよ、とすすめていました。私たちは、そのことよりも父の立場を心配して、部隊から逃げたと知れたら大変だから、……私たちは私たちに考えて移動するから、……と父に言っていたね、父は諦めたように部隊に戻ったんです。

それから五月下旬に、私たちは避難しました。着の身着のまま

から、おにぎりを一個ずつ貰って、腹ごしらえをしましてね。ほっとして、ああこの自然壕は安全でいい所だね、そう思いつつ、そこに一泊二日したら、また友軍の兵隊がきて、ここは日本軍の壕だから、みなさんはもっと南へ下がらなさい、ここは安全でないから下がれ下がれ、と言われてね。

私たちはそこで散り散りばらばらになって、兵隊に言われた通り南の方へ下がって行ったら、急に敵の攻撃が激しくなって、眼の前に、もう艦砲射撃はくるし、上からは爆撃でやられるし、昼も夜も、ほとんど歩くことができませんでした。そしてあの家もこの家も、樹までも、真栄里部落一帯は燃えっぱなしでした。私はあっちに隠れたりこっちに隠れたりして、逃げ廻ったんです。

そして私の眼の前で砲弾が破裂して、爆風と一緒に土砂をたたきつけられて、顔一ぱい焼けた土がくっついて、一時は眼も見えなくなつて、赤ちゃんは乳が出ないもんだから泣き通ししてはじめて、その子の頭から背中からお尻まで、おできみたいに焼けた土がくっついていていたんですよ。私の顔にくっついた土は瘡みたくいになって離れないもんだから、仕方なしにそのままにして、あっちこっちに、石垣の隅や小さい壕に、塊っている人たちと一緒に隠れようと思つて行くと、お化みたいな人、鬼みたいな人、とみんなから嫌われましたね。あんなたちはどうせ死ぬんだから、あっちに行つてちょうだい、と避難民に言われましたね。

私も、こうなつたら、もう死んでもかまわない、この顔ではどこにも逃げられないし、子供は子供でよく泣くし、捨てようにも捨てられないし、諦めた気持で、もと来た同じ道に戻って行つたわけで

で。私は赤ちゃんをおぶって、小さい妹や弟たちの手を引いて、歩いて行くのが精一杯で、荷物はほとんど持てませんでした。

自分の部落から、小城部落の入口の長嶺です。そっちら夜道をずつと歩いて行つたんですよ。そして疲れが出てです。ずつと島尻まで歩いて行けそうにもなかったの、どうしようもないから、自分の家の墓地に行きましたのよ。墓地に行ったら、そこには二人の叔父が来ていましたね、墓の中から、棺桶やら厨子甕を出していらっしやうたんですよ。あちやうど都合よかった、臭くても我慢して、ここに入ろうと思つている矢先にです。友軍の兵隊がワッサイワッサイ押しかけて、明日からここは戦場だから、こっちにはいけない、疲れていようが、どうにかこうにかして、南へ南へずつと下がらなさい、と言うんですよ。

私たちは子供持ちで足もくたくたになって、歩けないからね、こっちが最後だと思つて、もうどこにも行きません、と言つたらよ、兵隊に強引に引っぱり出されて、歩け歩けされて、仕方なく私たちは、そこから夜通し歩いてよ、着いたところは、糸満の手前の照屋でしたよ。

私たちは照屋の部落の空家に一晚泊つてですね、それから夜が明けてから、また歩いたんですよ。落着けそうな場所を探して、糸満の田圃道を通つて、どこというあてもなく、ただ足が向くままにですよ。歩いて行きましたら、真栄里部落の方に出ていました。

そして真栄里の部落の入口に、大きな自然壕がありましたから、そこへ行つたら、避難民がごたがえしているんですよ。そこに無理して入れて貰つて、またその上、私たちは見も知らぬ他所の人

すよ。そのときには、八歳になる妹が、いつの間にか私の袖にかまつて、ずつと泣きながら従っていました。

そして糸満の田圃道の方へ、私はおぶっている赤ちゃんをあやしなから、妹をつれて、歩いて行つたら、薄暗い中にとどき照明弾でぱつと星のように明るくなったとき、むこうの方にアメリカ兵が見えたくて。私は死ぬつもりでしたから、もう何もこわくなくなつたので、歩いて行つたら、アメリカ兵は何やら喋つて、手真似でどこそこに行きなさい、というふうに、道を教えてくれたんですよ。この調子なら殺されないうたなあ、と少し安心して、その方向に歩いて行つたら、すっかり暗くなって、さらに歩いて行つたら、急に照明弾があがつて、明るくなったとき、どこからともなく私は銃撃されたんですよ。そのとき私は左足をやられたんですよ。そこは田圃のすぐ側でした。私はそのまま倒れて、冷たく感じる足をさわつてみたら血が流れていたんですよ。小銃の弾が脛を貫通していたんですよ。また妹は、頃から首にかけて、それから膝頭も、弾が貫通していて、二か所とも肉が裏返しになっていました。

私たちが倒れたままになっているとき、すぐにアメリカ兵が寄つてきて、私たちは応急手当を受けて、そのまま捕虜されてしまったんですよ。そこから、私たちは担架に乗せられて、潮平につれて行かれたんですよ。

むこうに行きましたら、重傷患者と軽傷患者とは、別々のテントに沢山の負傷者が入れられていました。そこで私たちは一昼夜いてから、水上戦車、北谷の浜に運ばれました。私の足の傷はそれほど痛くもなかったんですけど、顔の方はヒリヒリ痛んでいました。

北谷の浜からは、呉屋の病院に移されました。その病院に何日聞いたか、はっきり憶えていませんけれど、間もなく私は杖をついて歩けるようになって、赤ちゃんをつれて退院しました。妹は重傷患者として、病院のテントに残っていましたけれど、私はそこから美里へ行きました。

美里の部落は、ほとんど残っていて、一軒の家に何十人も詰り詰めになって入って、捕虜になった避難民が集団生活をしていました。食糧は、配給制度でしたけど、割合に豊富でした。私は呉屋の病院にいる妹のことがいつも心配になって、毎日のようにおかゆを炊いて、それを病院まで持ち運んでいましたよ。杖をついて、川端をつたってよたよた三十分以上もかかって歩いて……。

美里から呉屋に通じる道を、毎日のように往復しているときです。黒人兵三名がですね、とつぜん山の中から出てきて、私の前方を歩いて若い女の人を、さらって行きましたよ。一人の黒人兵がさっと担いで、二人の黒人兵は後からゆうゆうとついて行くのを、私は見てハツとして、後ずさりして引返して逃げたことがあったんですよ。あのとときは、あつという間の出来事で、他の人たちも散り散りばらばらになって逃げていました。さらわれた若い女の方は、叫ぶこともできませんでしたよ。

それから、その翌日、私は妹のことがひどく気になって、やっぱりおかゆを持って、呉屋の病院に出かけたんですよ。そしたらね、妹がいつものテントの中にはいないんですよ。たしかこのベットだったけど、どこに移されたのかね、同じベットに寝ている重傷患者に訊いても返事がないので、私はしよつちゅうそのへんをうろろうる

私は急にこわくなってね、夢中で病院の中に引返ししたらね、ちょうど私のシマ(部落)の小母さんと逢ったんですよ。現在の副区長さんのお母さんですね。その人は片腕がなくなっていましたよ。その傷口から、蛆虫がぼろぼろ落ちていますよ。生きていて、蛆虫に噛まれるよりは、死んだ方がましよ、と小母さんはおっしゃっていましたよ。そしてね、あんたはどうしたの、と訊かれたんですよ。私、私はね、妹が首も膝も怪我してこの病院に入院していたけど、昨日一日欠かして来ないうちに、妹は死んだんですよ、と説明してね。私はその小母さんと、夜通し泣きながら、語り明かしましたよ。

その後も私は暫く、美里でくらししていました。配給物は、おもに豆の罐詰でね、その他に集団で掘ってきたイモが沢山ありました。甘藷かんしょは皮もむかずに、ドラムカンで炊いて、キン-tonを作って、みんなに配っていましたよ。私は赤ちゃんを育てることで精いっぱいでしたよ。早くから捕虜になった人たちの中には、元気な人たちが多く、ほとんど作業に出っていました。女の人たちは米軍の洗濯の仕事をしていました。

私の顔は、まだ焼けた土がくっついていました。周りの人たちは、こわがって、敬遠していましたよ。ですから、私は暇をみて、顔にくっついた瘡の皮をひと皮ひと皮すこすこす削がしていったんですよ。そうするうちに、ヤケドの跡みたく白くなって、次第にもと通りになったんですよ。

その後、私は赤ちゃんをつれて、玉城村の船越に移り、そこで落ち着くようになりました。母は、真栄里からまったく別の道を歩ん

して、看護婦に訊いてもはっきり教えてくれなかったんですよ。私はそのとき、妹はもう死んだかもしれないと思うようになって、裏の山の、病院の墓地に行きましたのよね。

そしたら墓地に、妹の名札には、七セブン、七セブンが四つ並べて書かれていましたから、よく覚えていましたけれど、その番号札があつたんですよ。

その墓地ではね、毎日何人もの死体が運ばれてくるんですから、沖繩出身の男の捕虜が四、五人働いていました。死体は運ばれてくる順序に、穴を掘って、大人なら五名、子供が混じっているときは六名か七名ずつ、穴の中に担架からぼつくり放り投げて、埋めてね、番号札を立てた棒にかけていましたからね。私の妹の番号札は、昨日死んだところにあつたんですよ。私は糸満で妹と一緒に死にそこなって捕虜になってきましたからね、妹のことが不憫で、死んだと思うと悲しくてですね。私はその墓地に夕方まで坐っていましたよ。そこは山ですからね、風で、番号札がじゃらじゃら淋しい音を出すんですよ。番号札は一本釘に何枚か束になってかけられていましたからね。

夕方、私が墓場に坐っているとき、一人淋しい思いで、昨日来ればよかったのに……と嘆いても、誰も慰めの言葉をかけてくれる人もない。そこに来る人は、担架で死体を運ぶ人だけですね。私が坐っているすぐ側の穴の中に、死体が移されたときね、私ははつとしてそれを見て、びっくりしてね。見たら、穴の中に附せになった大きく脹れあがつた死体なんですよ。そして次から次に、死体が運ばれて、運ぶ人は黙ってなんにも言わずに、穴に放り出すんですよ。

で、つれていた弟を死なせたものの、無事でした。父は戦争に参加して、とうとう還ってきませんでした。私の主人は佐世保へ入隊していましたが、むこうに居付いて、戦争が終わった後も、帰ってきませんでした。

伊良波 ヨシ子 (二十歳) 家事

私は当時、結婚していましたが、主人が現地召集で入隊した後、子供ができてないもんですから、シユウトメさんから実家に帰されたわけなんです。

部落の近くには、山部隊がいましたから、子供のいない若い女性のみんな、軍の作業に出されて、私もそこへ毎日壕掘りに出かけました。

私の家には父がいなくて、母が大黒柱で、私のきょうだいは六名でした。一番上の姉は結婚していましたが、二番目はまだでした。三番目の姉は、仏印に従軍看護婦として行っていましたが、昭和十九年の十二月二十五日沖繩に帰ってきて、当時は、山部隊に勤めていました。二番目の姉も軍にかり出されていましたが、実家にいたのは、母と私と妹と一番下の弟の四名でした。

そして米軍が上陸した後、艦砲射撃が烈しくなった頃、友軍の壕掘り作業は中止になりました。それで私たちは、最初は叔父さんの家の壕に入っていましたけれど、後で防衛隊の小父さんたちに加勢して貰って、自分の家の屋敷内に壕を掘って、そこにずっと閉じこもっていました。

前線が首里あたりに来ているということで、五月の下旬に、南風原の小学校が陸軍病院になっていましたから、その軍部から、住民は南部へ下がるよう命令がありました。また陸軍病院の兵隊たちも下がりはじめたんです。そしたら私たちは、一番上の姉が高嶺村の真栄里部落に結婚して行ってしまったから、あんまり砲弾が激しく飛んで来るもんですから、真栄里に避難しようときめて、母を中心に抜けて、最初は小城の自分の家の墓地に行っていたんです。

そこへ行ったら、中頭の人たちが私たちの墓の中にあるものを全部出して、自分たちのもののように中に入れていたんです。だから、やむをえなく、いよいよ家も墓も捨てることにきめて、一たん家に帰ってきて、食糧やら生活必需品やら、いろいろと荷物をまとめて持ってきて、そして南部へ向かったんですよ。東風平(同字)を通して、志多伯部落に入っていましたね、志多伯から与座に出て、そして国吉に出て、国吉から真栄里に行っていたわけなんです。

家を出るときは朝でしたけど、途中で艦砲が激しくなって、隠れながら歩いて、夕方頃になってやっと真栄里の近くまで来ていました。途中、あっちこちに兵隊や住民の死体が転がっているのを見ました。姉と妹は友軍と一緒に新垣の壕に行っていたそうです。

私たちが、弟と母と三人で、真栄里部落に着いたときは、砲弾はそれほど激しくなかったもんだから、一番上の姉の嫁いだ家を探したんですけど、判らなかつたので、最初は他所の空家に入っていました。それから二、三日したら、激しい攻撃を受けるようになったんです。私たちはやっとのことで自然壕を見つけたして、そこに大勢の人たちと一緒に入っていたんです。それから四、五日したら、

岩の側に、簡単な壕を掘って貰ってですね、一時凌ぎに私たちはそこに入っていたんです。ただそこでは、水がなくて、水に困ってですね。ちょうど静かになった朝方、うちの母がですよ、姉の家を探して水を貰ってくると言って出て行ったんですよ。ところが、いつまでも帰って来ないもんだから、私が迎えに行っていたんです。そして、急に艦砲射撃が始まって、あんまり激しくなっていましたね、私は母を見つけたんですけど、二人とも帰れなくなりましたよ。私はやっと母の側まで行って、一緒に石垣の陰に隠れていたんです。そのときに、砲弾の破片で、母は足を切断されてですね、倒れていました。出血がひどいだけで、痛がりもしなくなりました。三十分ぐらいたしたら、母は痛がって悲鳴をあげていました。そこへちょうど友軍の衛生兵が逃げながらやってきたので、母の怪我を見て貰ったから、大腿部だから放っておくと出血多量で死ぬから、応急手当をしようと言って、母の大腿をきつく縛って下さったんです。ところがその衛生兵もすぐ胸のところに破片で怪我なさってですね、這って逃げて行きました。近くで隠れていた三、四人の避難民の中の一人は、お腹をやられてですね、内臓がゆるめるとび出してですね、それでもどこかへ逃げて行きましたよ。みんないなくなっていて、私と母だけがそこに残っていました。

何時間か経って、艦砲が鳴り止んだ頃、中頭の親戚の人たちが、様子を見にきました。そしてみんなで母を壕にかついで行っていたんです。母が怪我をしたのは、朝の十時頃でしたけど、母は夕方五時頃に、とうとう息をひきとりました。それで、夜になってから、みんなで畑の中に穴を掘って、母の遺体を埋めましたよ。

友軍がきてですね、ここは兵隊が使うから避難民は出る、という立退き命令があつて、大騒動になったんです。

土地の人たちは、自分たちの部落の自然壕だから、ここから出て行くあてもないから、出ない、と頑張ったらですね、兵隊は日本刀を抜いて振り廻して、みんなを追いちらすもんだから、やむなく、避難民はみんな追い出されたわけなんですよ。

それから私たちは、近くに、貧弱な小さい壕を探して、そこに四、五日入っていました。小さい穴に、ぎっしり四、五十名も入っていたと思います。そしたら、またも友軍がきてですね、十名あまりの兵隊が押し入ってきて、避難民は邪魔だから出る出る、と言っていました。でも、そこから出たら非常に危いので、みんなどうされてもいいと思ひ、どうしても出ようとしないもんだから、兵隊たちは仕方なく私たちと一緒に餓詰めになって入っていました。

壕の中では、小さい子供たちがひっきりなしに泣いていました。子供が泣くと、敵は電波で探知して、艦砲射撃の目標にする、というわけで、兵隊たちは、子供を泣かすな、泣く子は殺してしまえ、と言っていました。とくに赤ちゃんは、母乳が出ないもんですから、しょっちゅう泣いていました。すると兵隊が母親に向かって、口にタオルでも押し込んでおけ、と怒鳴っていました。今にも殺しかねないほど兵隊たちは怒っていたので、みんな子供を殺されるよりは出た方がいいということになって、その壕から避難民はみんな出て行っていました。

そこから出て遠く行かないうちに、私たちは中頭の叔父さんたちに逢ったもんですから、その叔父さんたちの力をかりて、畑の横に行きました。その翌日も、そこには艦砲かどんどん落ちてきて、私たちの向かいにあった壕は、直撃を受けたんです。そこに入っていた避難民の二人は、その場で即死、あとの人たちはみんな怪我していました。私たちは危険を感じて、その夜、そこを出たんです。そしてあてもなく歩いてですね、砲弾の中を逃げ廻って、着いたところは、真壁部落でした。

真壁の小学校の前に出たら、友軍の荷馬車がありましたから、その下に隠れていたらですね、兵隊が出てきて、これには砲弾が積んであるんだよ、あんたたちはふっとばされてしまふよ、と言われて、そこからまた私たちは夜通し歩いて、糸洲・小波蔵という部落に行きました。

そこにきたら、静かな朝でした。民家もところどころに残っていました。私たちは、その中の空家に入っていたんです。気がついたら、一人の兵隊がその家の隅で怪我して倒れていました。両足の傷口から蛆虫がわいてですね、その兵隊は苦しそうに、私たちに包丁をかしてくれ、って叫んだんです。それで私たちは怖くなって、その家から逃げ出して、山の方へ行っていたんです。

山の中に行ったらですね、怪我人が大勢いました。みんな瀕死の状態ですから、私たちはまた怖くなって、そこから逃げ出してですね、あてもなく夢中で歩いて行ったら、摩文仁の海岸に出ているんです。

マブニの浜の上には、アダンが繁っていて、私たちはその中をくぐって歩いて、岩の多い砂浜に出ました。その大きな岩の下に、穴を掘って、隠れていました。もうそのときには、荷物はほとんど

なくなっていて、持っているものといえば、鏢節と罎入りミルク一個でした。そこに一日いるうちに、鏢砲がとんできて、中頭の叔父さんが脇腹をやられ、肋骨がなくなつて、二時間ぐらいいしてから死んだので、私たちはそこを出て、またアダンの中に入ったんです。

アダンの繁みの中には、友軍が掘ったタコ壺があつちこちにありまじつたけれど、そこはなんだか危いような気がして、ずっと歩いて行ったら、今の「健児の塔」の下のところに出ていました。その岩の下に、また一日いて、私たちは海岸線つたいに具志頭の方に行くつもりで、海の中を歩いて行つたんです。その海は、波打際でも、凸凹で、浅いところがあつて、深いところに嵌まりこんだりしながら、夜通し歩いてですね、夜が明けると、少し引返して、鏢砲射撃をさせて岩の下に隠れ、夜になったら海岸線を歩いて行つて、具志頭村の与座の海岸、ギーザバンタですね、あそこに出たんです。

ギーザバンタには、死体があつちこちに転がっていました。ただあそこには、水が岩の間から流れ落ちてくる場所があるんですよ。そのへん一帯には、岩の下あたりに穴を掘つた壕や、小さい自然壕があつて、避難民と友軍の兵隊がいろいろ混つて入っていました。ギーザバンタは、最後のどんづまりの地点で、眼の前の海には敵の軍艦が待ち構えていました。

「私たちがその壕にいたとき、一緒にいた一人の兵隊がですね、沖繩人がスパイを働いたために、この戦争はこんなに無残な負け方になつたんだ、と言つて、気がおかしくなつたみたいになつて、沖繩のほつて、上の方に出てみたくて。そこは原っぱになつていて、すぐ近くには、小さい松林がありました。その松林に、私たちは入つて、歩いたら、そこに米軍の電線がいっぱい張られているのも判らないで、足にひっかけつてしまつたんです。そしたら、急に前方の火焰放射器から火がとび出して、私たちの方へ追つてくるし、機関銃の音も聞こえて、大変なことになつたんです。一緒だった小父さんは足をやられ、女の人は腕をやられ、助ける暇もなく、私たちは森の中へ逃げました。森の中に、小さい壕を見つけて、私たちは軀をくつつけ合つてその中に入つたんです。なんだか非常に臭かつたんですけどね、生きたこちもしないで、ずつとちじこまつて入っていました。機関銃の音はいつまでも止まらないんですよ。とうとう夜があけて、静かになつて、それでも私たちは（六名でしたけど）そこにじつと坐っていました。外は小雨が降っていました。すると、遠くの方からアメリカ兵がこつちに向かって歩いてくるのが見えました。アメリカ兵は、雨ガッパを被つて、小銃を脇にかかえて、こつちに近寄つてくるんですよ。そこには、若い女は私ともう一人いましたけれど、もう怖くなって震えあがつてですね、私たちは男の人たちの背中の方にかがんで隠れていたんです。そしたらね、男の人たちが、あんたたちは心配しないで笑顔を作つて先に手を揚げて出て行きなさい、さ、早く出て行きなさい、とすすめるんですよ。でも私たちは、とても怖わくてじつとしていたから、しまいには、いたたまれなくなつて、十七歳になる男の子が、真っ裸になつてですよ、持っていたタオルを旗のようにしてですね、壕の前に出て行つたわけなんですよ。

人は小銃でみんな撃ち殺してやる、と騒いでいました。そしたら、ある小父さんがですね、沖繩人にスパイがいるもんか、友軍が必ず勝つ勝ついうもんだから、わしらもこんなに苦勞してきたんだ、どれほどの沖繩人が犠牲になつているか、知つているのか、お前が撃ち殺したいなら殺してみろ、と言ひ返したんですよ。

すると兵隊はね、小銃の木のところで、小父さんの顔を撲つたんですよ。それから、二人はとつとくみ合いになつたんですよ。そしたら、兵隊たちは、私たちに危いから早く出なさい出なさい、と言ひ、女子供はみんなそこから逃げて、近くの岩の間に隠れて見ていたんです。そしたら横から別の兵隊が出てきて、とつとくみ合つて二人を分けて、戦争に追い詰められたからと言つて、避難民をいじめのお前こそ悪いじゃないか、と言つて暴れた兵隊を叱つていました。

その喧嘩が終つてから、午後時一か二時頃に、海の方のアメリカの軍艦から、「デテコイ、デテコイ」と呼びかけるんですよ。拡声器で、安心して捕虜になつた方がいいというようにことを説明してました。ところが私たちは、捕虜になつたら米軍に殺される、ということ、兵隊たちから聞かされてましたから、避難民は誰も出たがらないんですよ。

そのうちに、喧嘩していた兵隊も他の兵隊たちも、突然、何もかも脱ぎ捨てて、フンドシも取つて裸になつてですよ、出て行つたんです。だから私たちは、晒然として眼をばちばちさせてました。

それから夜になつて、避難民のほとんどは穴から出て、塵をよじ二人のアメリカ兵は、私たちの方に小銃を向けて、覗いていましたけどね、すぐ小銃を上に向けて撃つて、また地面に向けて撃つてから、デテコイ、デテコイするわけなんです。そしたらね、男たちが先になつて出て、私たちも後にづつ出て出たんですよ。まだ少し薄暗かつたんですけど、明るくなるまで、私たちは壕の前に立たされてました。アメリカ兵は、まだ壕の中に人が残つていてと思つているらしく、ときどきデテコイデテコイと叫んでました。そして、すつかり明るくなつて、壕の中をよく見たら、五名ぐらいの兵隊たちが塊つて死んでいたんですよ。そのとき気がついたので、私たちが死体の上に乗つていたわけですよ。非常に狭い壕でしたから、死体の上に坐らないと、坐る場所はなかつたんですよ。

それから私たちは、アメリカ兵につれられて、キビ畑の上を戦車を通つたらしく、平坦になつたところをすつと歩いて行つたら、テントのあるところに来てました。テントの前に、私たち六名は、しばらく立たされました。裸になつた十七歳の男の子は、くる途中で拾つた着物をつけてました。それから一時間ばかり同じ場所に休憩していたら、四名の捕虜を、別のアメリカ兵がつれてきました。その人たちは、食糧やら食器類やらいろいろの荷物を持ってました。私たちは全く手ぶらでした。そのうちに、アメリカ兵がコーヒーやらミルクやら飲み物をもつてきてくれました。私はもう命だけは助かると思つてました。捕虜はだんだん殖えて、四、五十名になつてました。そこへ、戦車が四台きました。ジーブもきて、ジーブに乗つていた通訳が、私たちに、あんたたちは何も持っ

ていないようだけど、後で困るから、今のうちに壕から鍋や釜を拾ってきた方がいいよ、と教えてくれました。もしたら、私の弟が急いで行って、飯盒を探して持ってきました。

それからアメリカ兵は、男と女を別々に分けましたよ。男の人たちは、戦車でひき殺されると思っていて、おびえていました。そして私たちに向かって、女子供はアメリカがつれて行ってどんなことをするかわかんぞ、とおどかすんですよ。そうするうちに、アメリカ兵たちは戦車から降りてきて、男の人たちばかりを裸にして、身体検査をしました。それが終ると、通訳を間において、兵隊だったか、防衛隊だったか、避難民だったか、いろいろと質問していました。男の人たちは、みんな避難民だと頑張っていましたよ。その中には、兵隊や防衛隊も混っていましたけど、みんな嘘をついていたんですよ。

夕方近く、五時すぎに、その広場の前の岩のむこうから、日本兵の斬り込み隊が、突進してくるのが突然見えたくて、すぐアメリカ兵が機関銃で撃ち殺してしまっただけです。それから、国頭に突破して逃げるつもりで海にとびこんだ五名の日本兵が、つれてこられました。その中に沖縄出身の兵隊がいて、私たちに向かって、あんたたちはアメリカ兵につれて行かれて大変なことになるよ、今のうちに死んだ方がいいよ、と語りだすんですよ。

夕方になって、アメリカ兵が食べものを沢山持ってきました。配られても、避難民は毒が入っていると思っていて、なかなか食べようとしませんでしたけれど、兵隊たちは、ぜんぶばくばくがめつく食べるので、その様子を見て、なんでもないかと判って、私たちが安

す。私のきょうだい六名のうち、生き残っていたのは、三名でした。私は弟とずっと一緒にいました。

長嶺 オト (三十三歳) 家事

戦争当時まで、私たち夫婦は、兼城村の座波の小学校の前で、「そば屋」をしていました。

沖縄戦が始まりかける頃、近所に駐屯していた伊藤隊の隊長が、あんたたちは軍に食べものの協力をしなさい、と命令されましたから、私は部落のあちこちの家から、イモクズ(澱粉)を一合か二合ずつ集めて、それで餅を作って、軍に出したりしていました。

たしか五月の下旬頃、空襲や艦砲射撃の状態から私たちは危険を感じて、すでに米軍が上陸しているのも知らずに、国頭に疎開しようと思っ、その準備をしていました。そこへ友軍がきて、あんたたちが山原に行くのなら、ちょうどわれわれの部隊も十九日に嘉手納に戦に行くことになっているから、あんたたちを二十一日に軍の馬車でつれて行ってあげるから、それまで待っていなさい、と言っていました。

そして十九日には、伊藤隊は部落から引揚げて行ったんです。ところが二十一日になっても、友軍は帰ってこないんですよ。二十三日になつてから、北海道出身の中村という兵隊が馬車をもって来ていました。その兵隊がいうことには、もう疎開は遅すぎる、山原につれて行くことはできない………というんです。島尻に踏みとどま

心して食べたんですよ。

六時頃に、みんなはトラックで具志頭の小学校に集められました。そこには、何百人という大勢の避難民が集まっていました。私たちは具志頭小学校に泊りして、そこから富里に移されて、二泊してから、歩かされて百名の原っぱにつれて行かれ、百名に泊り、その後、佐敷村の富祖崎という部落に一月間ぐらいいました。富祖崎は戦争の痕跡がなく、家も畑もそのままでした。雑話とカンパンだけの配給で、避難民は農業をしても、大勢でしたから、食糧難でした。

それから避難民は一括に馬天港からアメリカの船に乗せられ、国頭の大浦湾に送られたんです。大浦湾の長崎ですね、そこから大川(久志村)に移されました。大川というところは、食べ物は何もないんですよ。米軍の配給といったら、赤いザラザラした砂糖だけでした。砂糖は飯盒の蓋一杯が一人分でした。砂糖と水だけですから、みんな下痢をして、栄養失調になって、瘦せかけていましたよ。山にあるフーチバーや野草などを取って食べていました。あそこは大へんなところでした。山の側にテントを張ってあるんですけど、テントの側までカラスが来るところなんですよ。年寄りや子供たちは、つきつきと死んでいました。

私と弟は、そこに一月いましたけれど、これ以上いると、死んでしまおうというわけで、そこから山道をずっと歩いて、金武村の惣慶にいる親戚の人を頼って、行ったんです。

惣慶に行ったら、シマ(部落)の人たちとも逢いましたし、米や雑話の配給もありましたから、どうやら落着くようになったんで

る他はないので、壕を掘ることが先決だから、あんたたちの親戚の山に壕の掘れるところはないか。と訊かれて私たちは、小城に兄弟の山があります、と答えたら、じゃその山に壕を掘りなさい、馬車一ぱい松の木をあげるから………とやることになったんです。

私たちは兵隊と一緒に小城に行って、親戚の人たちの協力で、山の中に壕を掘りました。そしてその壕に、私たちが親戚の人たちと一緒に、十八名あまり避難していました。兵隊たちの壕も、近くに掘ってありました。五月の下旬、その壕に入ってから間もなくして、すでに敵は首里までできているという噂がある頃、友軍の命令がありました。そして、小城部落から十一名の男の人たちが首里の方まで弾薬運びにかり出されたんです。出かけて、翌朝、生きて帰ってきたものは、三名でしたよ。一人は手足から全身傷だらけでした。その日から毎日、兵隊や防衛隊の怪我人がつきつきと、この部落にどんどん入ってきたんです。そして怪我人の話から、前線が、首里からだんだんこっちの方へ近づいてくるのが判ったんです。

六月二日に、私は知り合いを頼って、座波に壕を探しに行つてみたら、座波の方も、島尻の方へ避難するといつて騒いでいて、壕もなかったもので、また小城に帰って、不安ながらもとの壕に入っていました。砲弾が激しくなつて、昼中は外にも出られず、御飯も炊けなかったもので、壕の中に閉じこもっていました。麦粉(炒った麦を粉にしたもの)に砂糖と水を入れて、粘って、それを食糧にしていました。

ある日の夕方、怪我した兵隊たちが壕に入ってきました。一人は顔半分怪我していました。何やらしきりに言つて、口も歪んで

声がもれて聞き取りにくかったけれど、よく聞いたら、何日も何も食べてない、と言っていました。その声が、キウキウ空気の抜けるようなへんな声だったので、私は思わず笑ってしまっていました。笑ったら、その兵隊は怒って、何やら、苦しうに喋って、また別の兵隊に、私はさんざん怒られましたよ。あなたそんなに笑っている場合じゃないよ、今日死ぬか明日死ぬかの世の中だよ、子持ちのくせに、なんで疎開しないで、そんなところにいるのか、と怒鳴りつけられたんですよ。私は悪かったと思って、すみませんすみません、と詫びたんです。それから、その兵隊たちに、馬肉の味噌漬があったから、食べて下さい、と出したら、顔半分怪我している兵隊は、馬肉を手で口の中へむりやりに押しこんで、もぐもぐ食べていました。こんなにしても、生きれるかな、と私は思いましたよ。

それから二、三日したら、敵はもうすぐ近くの、クシバルのアカミチャーまできているという話でした。もうその壕にもいられないと思って、私は主人と二人で荷物を壕の前に出してはみたものの、五名の小さい子供たちをつれて行くことができないので、どうしようかと途方にくれて、坐っていました。そしたら、主人の兄さんがきて、あなたたちは死ぬ覚悟ができていられるかもしれないが、この小さい子供たちが死ぬのをただ見ておられるのか、さ、元氣を出して逃げよう、と言って、次男（六歳）をおんぶしてくれました。それで主人は荷物を持てるだけ持って、私は三女（二歳）をおんぶして、次女（四歳）の手を引いて、家族みんなで逃げて行っただんです。

座波のところまで行って、あっちこっちの壕に逃げ隠れるたび

すよ。そのとき、一緒にいた西原の人が、弾が横から飛んでくるときは、敵がすぐ近くまで来ている証拠だよ、と教えてくれたから、私たちはそこからすぐ逃げて行っただんです。

それから兼城を通って、チャン（喜屋武）まで行っただんです。ここまでの道のりは、砲弾が激しくついですね。何度も、紙一重で死ぬところを、くぐりぬけてきたんですよ。そして喜屋武の、喜屋武城では、大勢の友軍の兵隊たちと一緒に、ちよっとした窪んだところや、岩陰に、隠れていました。

喜屋武岬は、もう南の果てだから、そこから逃げるとしたら、崖をおりるしかないから、そこが本当に最後のところですよ。

海岸のすぐ上の、崖の岩の下に、兵隊も避難民も、小人数塊が、隠れていました。私たちはその一つの壕に、一週間ぐらいい入っていました。その頃、水汲みに行くときも、一番こわかったのは、友軍の兵隊でしたよ。子供が泣くと、兵隊が出てきて、子供を殺しやしないかと、大変こわかったですよ。兵隊に殺された話も聞いていましたから……。また友軍の兵隊は、食べ物がなくなると、銃剣を持って出てきて、避難民に食べ物を要求してよ、出さないと、あなたたちは戦争の邪魔だから、殺してしまえ、という命令が出ていられるぞ、と言っておどしおどしおどしていましたよ。こっちも、米は残り少ないんだから、少しずつしか出さなかつたんですけれど、兵隊は海岸の岩の間に、あっちこっちに大勢いましたから、なによりも兵隊が一番こわかったですよ。

私たちと同じ壕にいる兵隊たちは、いつも壕の一番奥の方に隠れていて、何もしないで、私一人で水汲みに行ったりしていました。

に、四歳になるタマ子（次女）がとても泣き虫で、しきりに泣くもんだから、兵隊からも避難民からも、みんなからその子のために嫌われて、兵隊からは、その子のためにみんなを犠牲にするつもりか、と叱られ、その子は殺せ殺せ、と言われてよ。

チン大城にも行ってみただんですけど、あつちには砲弾があんまり激しくって、一晚泊っただけで、すぐ引返して逃げたんです。チン大城では、私は子供たちと一緒にシンマー鍋を頭から被って、他所の薪小屋に隠れていました。そのとき、部落のアンマーは門のところから、私たちを見て笑って来ながら、すぐ倒れて、行って見たら、眼に小さい破片が入っているだけでしたけれど、病死したみたいで死んでいました。またそこでは、主人の兄さんがおんぶしていた私の次男も、破片で死んだんです。

もう私たちの部落には、アメリカ軍がきているという話だったから、私たちは、昼はキビ畑の中か小さい壕に入ったりして、夜歩いて、自分の家の墓を探しに、阿波根に行っただんです。

ところへ行ってみたら、私たちの阿波根の墓には、他所の人たちが奇麗に掃除を入っているんですよ。兵隊も入っていました。そして、もう誰も入れない、というんですよ。私は、この墓の主は私たちであって、親ファーフジ（祖先）からの墓なのに、あなたたちの勝手じゃないでしょう、と抗議したんですよ。そしたら兵隊が、あなたたちが味噌をくれるのなら、入れてあげよう、というんですよ。それじゃ今晚、部落に行つて味噌を持ってきてあげますから、と約束して、一応入れて貰って、それから夜中に部落に行つて味噌を持って帰ってきたところ、墓の横の方から、小銃の音がするんですよ。

私の主人は、足を怪我していましたので、寝たつきりでした。私が御飯を炊いて、食べる時になると、兵隊たちは寄ってきて、もう少し味噌を舂めさせろ、と手を出したりしていましたよ。そんなにして一緒に食事をしていても、私の子供が泣き出すと、この餓鬼、みんなを犠牲にするつもりか、と怒り出し、泣き止まないと、ものすごく怒って、誰か早く首を締めて殺してしまえ、と言っていましたよ。

子供が泣くから、弾がとんでくるのか、子供はしくしく泣くし、艦砲射撃は激しいし、兵隊は子供を殺せ殺せと言うもんだからよ、私は三女（二歳）を抱いて、壕の外に一たん出たんです。すると兵隊も私の後についてきて、その子は殺した方がいいよ、と耳うちしたら、その子は急に泣き止んで、私はまた壕の中に入ったんですよ。私が壕の中に入った直後、砲弾の音が出て、子供をしきりに殺せと言っていた兵隊の首が、とつぜん壕の入口の岩の上に落ちてきたんですよ。首は置いたみたいになって、唇を殴らせて、何か言いで出そうとするようにもぐもぐさせましたよ。その兵隊の軀の方は、壕の横に倒れていました。

私の子供たちの着物は、水をかけられたみたいで、血で濡れていましたから、私はびっくりして、怪我したと思って調べてみたら、子供たちは誰も怪我してはなかつたんです。兵隊の返り血をあびていたんですよ。

それから、その兵隊の死体は、夏だからすぐ腐って臭くなるというんで、首は別の兵隊が持つて、首のない軀は、私と別の兵隊と一緒に、それぞれ足を張って、下の方へ運んで、小さい窪みに入れて

砂を被せておきましたよ。

喜屋武岬の岩壁には、恐らく敵は、日本軍の残りがいるということを知っていたんでしょ、とどんどん霰弾射撃して、兵隊や避難民の死体があつちこつちに沢山ころがっていましたよ。死体はすぐ腐つて、金蟻がたかつて、蛆虫がわいていましたよ。

私たちがそこにきてから十日ぐらい経つと、アメリカの軍艦から拡声器で、「沖繩の皆さん、命がおしかったら、助けてあげます。はやく手を揚げて、出てきなさい」と言っていましたよ。

私は水汲みに、妹は板切れを取りに行っていました。私は頭に水を入れた鍋を乗せ、妹はこわれた空家から板切れを取ってきて、かかえて帰る途中、二人一緒になって壕に向かっているとき、海の方から声が大きく聞こえてきたんです。「命が惜しかったら、井戸端まで、出てきなさい。あなたの息子が歩いてくるのも、こっちはよく見えます。井戸端まで出てきなさい。沖繩の人たちが、大へん可哀そうです」というもんだから、私たちはびっくりしましたよ。

もう逃げも隠れもできない、軍艦からは何もかも見えている、と思うと私たちは、諦めた気持で、壕から出て、海岸の波打際に立っていました。そのとき、近くの岩陰の前に、十五、六人の兵隊たちが壕からぞろぞろ出てきて、集まっていました。捕虜になるつもりかと思つたら、斬り込み隊だったんです。隊長らしい人が、訓示していました。最後の斬り込み、今日は六月十九日、と言っていました。また、銃のないものは竹槍で、竹槍のないものは石でも、何か武器になるものを持って、必ず一人で敵を十人は殺すように……

すよ。アメリカ兵がきたら、誰も逃げるなよ、逃げたら撃たれるよ、と私はみんなに言ったんですよ。

そしてすぐに私たちは、捕虜になって、崖の上の方の原っぱに集められました。崖を登るときは、アメリカ兵たちが一人ずつ抱きかかえてくれました。

喜屋武岬の原っぱには、米軍の戦車もトラックもきていました。私たちはトラックに乗せられたんですけど、こわがつて乗れたがらない人たちも大勢いました。みんなどこかへつれて行かれて、戦車でひき殺されると思っていたんですよ。

私の主人はブラジル帰りでしたから、スペイン語が少し話せたので、スペイン語で訊いてくれたんですよ。そして主人が、みんな集めて、食糧もあたる、殺すようなことはしない、と言っているって、教えてくれたもんだから、みんな安心したんです。また主人は、自分は班長だから、自分がいないとみんな困るから、一緒に行動したい、とアメリカ兵に言つて、それも認められたんです。

トラックで運ばれるとき、喜屋武の村はすれで捕虜になった日本兵たちが、沢山の友軍の死体を一か所に集めて、埋める作業をしているのを、私たちは見ましたよ。

そして私たちは、豊見城村の伊良波の収容所に入れられました。そこには大勢の避難民が集められていました。そこからは、トラックで石川へ運ばれ、石川で落着くようになりまし。石川へ行つてから、泣き出だつた次女は、ハシカにかかつて死にましたけれど、後はみんな元気で、私は炊事班として働きました。

とも言っていました。それから兵隊たちは、散り散りばらばらになつて、崖を登って行きましたよ。すると崖の上の方から、パンパン小銃を撃つ音が聞こえたとし、見えるところで兵隊の何人かは、倒れていましたよ。

那覇の人らしい上品な奥さんだったんですけどね、壕から出てきて私たちの前で、帯をはずして自分の首に捲きつけて締めようとしたんですよ。私はすぐにそれを引き止めて、一分間でもこの世の方がいいんであって、なんで死のうとするか、と叱つてやりましたよ。自分の息子が撃たれて死んだから……と言うんですよ。息子が死んだからといって、あんたが死んだら、あんたの息子が死んだことも判らなくなるが……と私は言つてやりましたよ。

もうこうなつたら、捕虜になるしかない、と私は思っていました。ちようど主人が風呂敷包みを拾つてきてありました。あけてみたら、女ものの着物だけ十点ぐらい入っていました。それをひろげて、出てきた兵隊たちに、着替えませんか、と声をかけたら、女ものの着物をきて擬装しよう、と言つて、みんな争つて着替えていましたよ。

そのとき、崖の上の方から、アメリカ兵が何十人も小銃をかかえてガラガラおりにきたんですよ。「みんなデテコイ、デテコイ」とアメリカ兵がいうもんだから、私たちの側に避難民が集まってきました。私はそのときみんなに向かつて、一分間でもこの世がいいよ、男の人たちだけ殺すようなことがあつたら、私たちも死ぬから、はやまったことほしくない方がいいよ、この世がどうなるか最後まで見るつもりで生きてみようね、と言つてみんなを励ましたんで